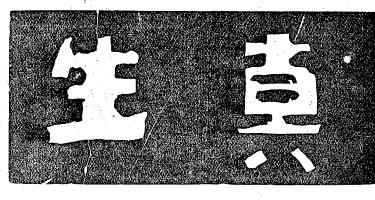
ૼ૽૽ૼૺૺૺૺ૾ૺ

そこに永遠の希望に生きた生命れば人の心も奥底から清められ

のず 流に



### 號月 卷 $oldsymbol{\overline{L}}$

は●に輝●れは●思如満く新がい春 新がい春 のを覺ゆる。 れつゝあることを感せずにの願いであるに、今や吾人みと喜びと力に滿ちた人生 友がる n 私の共や のう に入生 前に ためられ の幸福 途永 は劫に

### 目

● ● ● 與 平 與 再 並 生 道 友 個真我 寅 人生が 0) だ蕨 思及同信 ょ 同 規盟 約大 び盟我 b ♪個人主義 畑の發生に就て れなり り 初 Ł 阪 支部 會 主 綱 義 土問 土 尅 生 屋題 屋 意 觀空 觀 道子

で▲ふ月時▲へ外うか▲ もゐと▲なは證▲やじ▲觸▲で春▲▲見▲ す理もが是即行にでと即なるいこい心據正う `それ此のを然だえ正 ♪ふれ♪でに月な力しるのる見しかぬ月 oすのを矢正内がも をてと目のて正ら人が れで思張月に來の得觸いにでゐ月正が來 ばはふりら惱たでるれふ見あるが月あた ○得こえる證見がると 我なと一しみと あ がい唯月くがてるそたと D °れ者がもすでるた 心、心元思あ何 の矢的日つれ處 はの宗のれあもと 外張にがたばへ 恰み数をばるのて にり生來り正來 度がで見正。で四 正恩ある月見は苦 何我きね正月で 物がるば月らゐ 月籠るとはれな八 °い見ぬい苦 か心と駄にしる をを 喜感 ふれも が外云目なくと こるの而あ 來のふだるない びじ ともの見春 るあて °かいふ 正喜 かるも とかも 8 3 月び いらの 觸でたを いの我に ふでで にを れあ者祝 甦感 らるのふ にあは と影が らじ のみと うるな n 44 カラこ D うそ 喜ろ Ġ そさだ でれそ Ø うれけ れを びに 祝は でてで はでの

月

とて

か窟の尙れちつ通も云ちい °ででは春日て徹なふ我 なあ更で々もしいてが るらあ是佛で 、我心 o嬉る好に佛たがが °日逢ばい心佛 い正・ふか一のか °りつ外と 了月二 かにい こと六 底 こい時 かっ にへ中 到ばい るとはが ていつ いれば 本つと 正 即ち内にころ人がる 月 當もな に正 正月是 T 月でれ のあ喜 もがるが み 外落か佛 味りび にちとで 出正あ もたいも た月り ことふな 何きにい

處内を

との い正四

てそのれに正此人柔正信 (n る 切味 だれと かる やう 36 に解氣 るがあ れす 3 ば 3 馬 E 切の 力上 、全 人體 12 12 觸切 るれ れ味

とで

の見□ふ□此切別は□ばが□□ つのる T 0

てでれどれ ٢ ふがの味 2 多 b T かも T なては 3 るいのは ところ 健で治 0 てら そ あ れで るれかは とな τ 又ね云い 間も立古 化切派道 されな具 れ味力屋 もが掛の せ少に店 ぬい掛に も譯て在 ので カて でもたる あな Ł JE.

るいて宗

刀の でえ 古 、と全あの聖塊れ切味切宗のを る ) 道 `觸元ゐは味い味椽れ それがる其 信 B 0 崙が せ仰の切刀のいにい 二の黒ぬのでれのは譯轉ふ 飯がれけつ獨漆あ味は味生裸 で露の るひなが命値も ひを「黒漆の崑崙でれての中の何處に在い、無い處に在 崑 素 b きい視崙の このあ胡 無中り摩いの・化 でが あ音を あ る E ō Ŭ 2 T ||夜裡に走る||在る、全體に調 のて る。籠つ も走 Ø τ を動 ゐる 漲か カュ Z 云て ٤ てのて 探 3 ゐも居る のら刀て 根がれ身見 本そる全た 體と でれ あ全もがこる體の切ろ そのれで い生奥味 やかにで此 質しはあ處 はて目るに そゐに ,0 j 03 b

3 つを刃切體 時へ切味其 るれと崑れも を信味をで食でが吹な ・で のそ其事をでの切は鍛 あ信れ出へ るが味來た 人がぬ丈 のけ 自 n E か 出 3 0) で あ 7 'n in 妹 かぎ ち 刀 ° 3.0 で

法るみ□あ□も

信で人 かゞ 寢 た人 り間も 起が切 心きたり、治信であり、 3 話し人切 た間れ りが味 し飯が てを切 る喰れ るて味

# 眞生同盟の發生に就て

**圣** 

道

### 一、眞生の意義

ざる人生の理想に向つて常に奮戰努力して理想實現の世界へと私共の生活が向上し發展して行くことで であつて永劫に變らないものでありますが、此の變らない宇宙の眞理によつて、 新しく眞生の意義とは何であるかなご詳く述ぶる必要はありません。乍然宇宙の眞理は常に常住のも あります。 よつて永劫に生きんとする私共の實際生活は永劫に變つて行かねばなりません。それは即ち永劫に變ら りつゝあるのでありますから、私共の眞生に關する眞生の意義は永遠に變らぬものとしましても、之に 眞生の意義につきましては己に眞生誌第一卷第一號の卷頭に於て私は述べておりますから、 宇宙の萬物は永劫に變 今更こ

現すべく之に共鳴せる道友の社會生活への同盟であります。 此の意味に於て眞生同盟とは眞實生活への同盟とも解すべきであります。 即ち眞人としての理想を實

## 二、異生の自覺

は甚だ以つて少ないのであります。從て此の自覺なき人々の生活は一切が悉く無自覺の生活であるとい の中の生活狀態を仔細に觀察しますれば、一切のものは皆宇宙の本源より來らざるものはないのであ 乍然真にこのことを自ら自覺し、又人をして真に此の事を自覺せしめやうとする人々の生活

面を望むれば丁 而で其の はらず社會は刻々として一面人 ゝ所は偏に其の人の眞に自覺するや否やの一點にあるのであります。 と等しき速度を以つて世は墮落 つゝあることを認められますが 到没せられつゝあることも亦事實で く手を望めますならば 其の人 Ø 叉其の反 自覺と否 あり

ますの・ 覺の上に立つものであります。 に亡びざる永生の自覺であります。 歡ぴは決して湧い ことはできない のであります。而て私共の此の世 間に於て生存している限り、此の天地の力と法則と惠みとを外にしては寸刻 ち自分と社分との間に よるのですい ご私共の厭 要するに此の眞人の生活を云ふに外なりません。永遠の望みと喜びと力の生活も主として此の自 宙の眞善美に對する人生の一致であり、融合であり、 乍然此の天地間に絶大なる を意味しませう、 はしいものはありまん。無限の向上とは價値の生活であり、人格の完成であります。 然に世 のです。 生ることであります。眞に生るとは偽りなき自己に歸ることです。 て來るも はともすれ てい 加之この私共が此の力と法則 そこには永遠の生命と無限向上の生活とが展開せられ のではありません。 つも自己を真に生かすことであるのであり 神と云ふも佛と云ふも要するに此の自覺の体現に外なりません。 に榮えるのも亡びるのも要するに此の天地の大道に一致する 生きんとする人生の上に於て生に對するの死、 と法則とが存在する限り、 此の事を打忘れて、 永遠の生命とは不死の自覺であります。 の外に在 反つて 体現であります。 り得たり 天地の大道に反することが多い Ø 中に生存 ますの としても人類の生活 せる私共が此の力を脱する も生存す 人格の光といふも完成と 大~ ない限り、 榮えに對する いへば私共 偽りなき自己とは即 天地と共に永劫 眞の人生の のであり か否か たいそれ 0

## 三、入信と体現

入信と云ふは此の自覺に入つた當体を云ふのであります。 而て体現といふは此の自覺から出た人類の

て私共の心は此 まぬる あることを發見せざるを得ないのです。 かと云つて、 我の中に宇宙あり、 τ 人間の手の屆かぬ所、 とならざるを得な 私自身の勝手な心のみの作用でもないことに氣付くのです。 の欲求よりして自ら宇宙の中に私共は疑は 向上するに ります。 反省す b 宇宙の中に我あることを發見します。 のです。 て眞 つれまして、 何とかして宇宙の大自然に たい肉慾と財慾と名譽の爲めに 而て又私共の日常が真實の價値を求め 而もそれが私自身を離れて之を知ることのできるも ての自覺も 私共の生活は更に進ん 融合 んとして疑ふこ せなく 言かゆれば宇宙と我とは一体にし のみ で永生の欲求となり ては は 11 而も宇宙と我とは とのできない真善 止まないものとなります。 た時代も て止まぬものとな ありませう。 不死 のでも を求 美の世界の 2 めて止 して不の中に τ なく 來ま

一であるの

自覺であ

分に考察すべきではない の心は永久に私共の生命の本源を尋ねずには居られません。 居ることも らざる深 乍然そ といる なる點がある、 き關係 して居られませう。私共の生命は宙宇のものです、 考へずには居られぬも なくて私はどこまでも 明かです。 不可思議なものでありませう。私共は此の關係に於て、 と云つて、宇宙と人生とを静に見れ のあることを真に知ることは己に入信の一歩であります。 私は山でもなけ 而て亦天地 かと思ふものであります。而て此の意味よりして、 のです。 の法則を離れ 私自身であるのであります。 れば川 而て此の私共の生命は宇宙の本源としての宇宙の生命を認めず でもない、 ては寸毫も生活することのできないものであると ば 亦圓然として、 牛でもなければ馬でも 而て其の生命の本源 而も此の私自身が天地 而て私共の生命は此の宇宙の生 私の外に萬物あり、 宇宙と人生との關係を今少し 私の生命を愛する 宇宙と人生とに ない と共に 而て亦 と一体 萬物 亦私共 المولاد 私は 0 於て飲ぐ可 の生命の 私共 <u>چ</u> د 萬物 し 私 充 τ カジ

Ł かま べき道はないことを發見するに到り 成せられ b 亦此の宇宙の生命より出でたる宇 て來るのであります。 +6+0° 而てそこに始めて私共の欲求する永遠の生命と無限の向上、宙生命の欲求と合致するより外に私共の理想として生き行

は亦人にも説いて疑はないものとなります。自分丈けで満足できないものは人にも亦満足させずに 体現となり、自覺の体現は遂に体現の自覺にまでならざるを得ないものです。 ζ. いも して現實の社 τ 私共の信仰はやがて入信の自覺となり、 會へ眞人の現はれて來るのも亦理の當然と云ふべきです。 T 此の自覺がやがて亦体現の自覺として、理想完成への運動となり、 入信の自覺昂まるに從つて、 自ら信じて疑はざるも の自覺はやが 社會改造 て自 このは居 0

### ¥ 盟の發生

の價値であつて、又一切萬人 なつて生るのが亦私共の生命であり、 共に始つて、 か の本源を尋ね ゝる思想 の要求は一人の上に現はて來ることもあり、亦多くの人々の上に現は の潮流 天地と共に永劫たる可き人類の心であります。 ば夫れこそ宇宙の本源より來ると云ふべきです。 は一朝一夕にして始まつたものでもなく、亦一朝一夕にして盛大を來すものでも 八の共に 生く べき生存の意義であります。 私共の價値であります。 而も此の心を私共に受けて、此の心と一 從て此の價値の生活は 從つて此の思想たるや實に天地 れて來ることもあります。 一面私共 0

於て人類の理 のです。 から此の上に生れて、真に生き行 から造られたものではなく、 は共存共榮の自覺より萬法一如の生活となり、 の意味の人類の自覺の發生が即ちこゝに云ふ眞生同盟の發生であります。 内から生れたものであります。 人生の一大向 上の運動であります。 公私一如の理想生活とならざるを 言換れば宇宙の本源た (二五、二、三三) 從て

(宗教思想と社會主義問題 四)

過ぎる 誤解 ほど の思想の初 と社會主義問題を論ずる前に から之をあるがれる方面が强かつたのでしたが、をも投げ打つべしとの修身の話にはほんとうに心 題に就 社 せられてゐるかを思ふとき恐くは思 倫理とか云ふものが好きでした。乍然それと でありました。そこで人の為め、國の 一面には非常に張い利己心がひらめ は小學時代 入主 て亦こ ものがありませう。而てそれ 會主義と云ふものが、 いて一考する必要がある に左右せらるとものはないと從つて私 め の誤解に始るものが多 >に之と同意味に於て私は宗教思想 から行いも出來ない 個人及び個人主義 V かばかり此の 0 くせに、 であり いは のでありま 主 い半ば 為め身命 いてお として此 ます。 世に 修身 0 13 0

明を見 ない 利己心 りも昔。 又一面にはどうしても身命を屠してまで社 為めに永い間 絕對利己主義 而も私は遂に自利々他一如の哲 士の倫理學 かつたのであります。 快とするところでありました。 に重きを置いてゐることは何と云 為め かと云ふやうな 之は要するに自利々他 の擴張 るに 盡すことは自己そのも 私が工業學校在學時代に 他主義と異にして其の實が最も 一説を知 至っ 心ひそかに獨りで苦しんだことも多 þз を主張するに到つたことは最も たのでした。それのないでした。それのでした。 利他心であると云ふことでし 気がし 然に私は今から二十年ばか T れは何 此の二つの矛盾の 理を自ら考察し の心は頓に一大光 於て加 ፠ Þ 亡ぶことでは 此の主義 かと云へば 旅水业之博 會國家 120 私 D3 0 T

なつ でありますが の利他主義でなくして反つて他をも害するも るもので ておるものであることを發見し 主義は反つて 自ら此 、此の意味から云へば多く 個 又利他主義と云へるもの の境地を主張するに到つた 人主義にもならずし たのでありま 0 て自らを O E が眞 間

な多くの意味をさへ社會に傳 ありませう。乍然ともすれ 光も言葉とい ますが、 ありますから、まして一般の人々に普通語とし は服密な考察を經た學術語 は其の符號は立派な言葉であると言うる 事柄の意味を充分に言表はしうるもので 時とによっては其の意味を異にして來る に反つて社會を害する 欠くものゝ多いことも でゐる言葉に於ては 所謂社會 ものでありまして、 のが一つの事柄に E 行は n にさへ至る言葉 ば之が爲めに反て反對 亦止むを得ない 7 へてい途にはそ 其の言葉の意味の でありましても いる言葉と 其の符號が其 ものが つた時 ので ريا. 其の 35 8 Ø` あ

> とを思ふも 間の多く 15 つい τ のであります は此の弊害の幾多を礁 此の弊害の幾多を礁に持つてゐるこ而て今此の個人及個人主義に就ても 個人及個人主義とは 言葉を使ふ上に 々に於ては Ó 會 つゝしむべきことで おきまし 何なるもので ても最も

ならば あり それ 社會と申 +6+0° 主義の 社會と相 して ませうの 個 而も其の個人が一面には又其の家族なり 人の問題と云いうるのでありまして、個人と云ふ塲合には明に社會の問題で 問 解す 會の 對的に區別して考へることもできます 題も亦社 しましても、 るのであります 密 一員として内 ば個人對家族、 12 之を社 申しますならば個人と云ふ言葉 會主義問題と のでありまして、 個人が二人以上の集團 對個人 在的にも見られること 又之と同様に一概に 對立するのであり 個人對國、 會の問題でなく として考へます へる 社會と分 のであ 個人對 個人 とな

主義とも言い得られるのでありませう。個人主義、國家主義對個人主義、社會主義對個人表さ云ふ言葉に對しますならば、或は家族主義對

内に つて がある ځ あ を雑然と列 のみになり 家 結 8 体 は此 やに数は 然乍國 けの幸福 ば b あ から B 若一致するも 私は れて來た 是 限り、 þ で 0 きまん の しょす ح 7 切れ べられ 個 其 心であり と國との間、 個人と有機体 幸福であるとの結論 國家の中に家族あり、 る所 つた 0) 入 社會全体の幸福は直に國 ないも でした。 のであります。 主 初修身や道德の問題で之等の言葉 のであ な個 義の心が頭 其の非とする所は個人 0 從て亦その いつも、社會 な のがあるのを如何 人 りまし 八主義を排 らば問題は全く 而て 失を異 家族と家族 的位 私の結論は をもたげて 一致して終始する 120 中に 2 であ にす して利 家族 と國家國家と n 乍然 の間 は社 生 b ます。 存せる個 家全体家 0 他主義 八主義で 利他主義 私の 全体家族 次の ともする 通り 心の で 丽 あ あ P 7 X

社會を は自分 民と 見ます 點まで と も考 個人 るも 一つの 丽 の點に於て個人 あります 於て て今 であ <u>م</u> 12 Ĵ 0 集合体 かろ 一つの 0 會の 日 A. 生活 現在 集合体 b 個 n 0) 類 ば . . 常に な 自由主義 の集 於て 活 0 集合体と見るならば個 1-家 0 5 過ぎず 0 と見い と社 こともないのであります。 都合上甲の國から乙の 0 此 社 或は又國家 ある 利害得 集り の中に **恒を避け** バラン の二者 b τ -の信 會 の生活 が家 と個 會との關係に於て私 ずる 若 して有機体では かゞ 失を異 の干係 社 ても自分對自 ス 人 は べきことを要求し 會で を保 であ との生活關係 有機体と見る もあり得るであらうと なごを認め と其の國家以 7 個人 會の要求 12 へにする ある 持 か j 不即 U ならば 人 Ó. 主義 として す 國 な 7 不 共は 1 ある × 30 合 離の干係  $\dot{\sim}$ 0 0 移住す て全く の生活 實際 而て此 0 社 1  $\Diamond$ 若し 會は 'n ぎの 12 Ø 底 要 0 か は 7 r かい

あります。由の中に調和せられるのを進步の過程に見るのでるのでありまして、而も此の二つの要求が自ら自

の意味 致す 悉正 で ころ ますと此 幸 であ 成は個 あ 0 立 一場も此 福は の意味に なつて 3 幸 は 0 く つてい 福 Ø から 12 い見方のやう 個人主義對家族主義若は個人主義對國家主 であ であります。 社 がける とは全 0) 利益を中心とせる家族主義 R 人 意味が 八主義對社 の標準を以て のと見る 於て、 8 の 社 るの 反す 會は 個人と 幸 3 即ち二者の であり 福 其の主 殆ん 1 3 ふのが であり になっ 亦 會主義と云ふ べきです。 かのやうに見 而て今や 社會との ご全く 個 一切を 0) ますから、 即ち社 理 T 社會 集團 想は 中心が į, 消 に於て互 るのです。 祉 **乍然一般に云ふ** 見 利 滅 ると云ふ 會對個 會 Ø で るの 害得失は常に 對立干係 一般 幸 あ て此の雨 3 は 福 人主義 **)**; に矛盾する 0 ٨ は 至當 然は此 直に 偷 0) 15 會 0) て來る 主義、 12 理 理 個 者の なり かゞ ٤ 0 想 人 學 個 \_\_\_ 3 \_\_\_ Þ

> のであ 3 失は家族 自ら家族 b ます τ 他 於て 中心の生活方式を探つて其の他の 主義を中心とし の 切を捨てる 人主義は て収 個 のであり、 八の爲めの 拾選擇をする 家族 みを

それ 人主 且 らば、 ~ \* F 3 は 2 つ 國家主義も ٤ 今日 τ 會 義をとる 亦計會主義も か 8 而 生活も • 家族 せらる T であります。 若し個 の所 0) 家族主義をとる 人 亦 之と同 祉 主義も 主義の中にも亦個人主義 會に於 べきか 充分 まで來て、  $\sim$   $\langle$ よしつ 家族主義も個 人主義の た抱括し得 家族主 抱 \_の τ 話せられ • 又祉 或は 原 ~ \* 一義も將 實際の人類生活は 中に家族生活も國家生活 會主義の中に 理 自己つて 社會主義をとる によ 人主義 うる 共の 75 か べき點ありとするな うで、 又社會主義も いこ の一考す 國家主義をさる も全部抱力 とは も國家主義も つの も此 國家主義の 8 の中心 の上に ありませ 中 其の べき b 練せら き間 充分 とよ か

道とな 徳で る社 りません。 0 會 あ 8 若は さ社 **b** \$ 0 す > 叉道 家の し之に 歩發達をも顧慮するを #. 0) 德 で個 的制 ことを顧 裁を 社 反するものある 主義 會思 3 ず 當然とするの 想 反 してして 0 つて 傾 亚 向 5 7 時は D. 自 つ場 かゞ つて 己 ら今日 之に 以合てい 當然 對す 0 0 8 0 -

では 會も へども した 從て少くとも 利他主義も のみ動く 73 やうな個人主義は 從て今日 國家も之を ると 7 其の中の一員として自己の いのであります。 家主義でも、 はありませ ふことは到底 0) が今 許 個人 の二は共に 人の 如日 きは 2 人は少く 13 利益を無視 ん。從つて 到底 會で 將又如何なる社會 V 到底一切の 而て之り同 0 できない有様で 3 が 計は 會 表面 面 نب しては 0 社 ク 何 一員 上自 向上を無視 人 會 の思想であり なる家 時に所謂 0 Ø) 2 、なして、 到 利 入るどころ 益を無視 主 底 族 耐えう h 義 と云 主義 世 0 L 社 利 て 間 \$

またとうこう) ロングルングによう思想の大势るの有様であります。 すると共にやがては此の二つが一つに歸らうとす

任感 する でも 本主義的 H の舊道德感に過ぎな は向 か 12 雖 H 12 ら出 b 12 なく 3 き民 ではなくて、 於 H 至つ 公共 ける n 0 12 族主義 ₹ 人 ŤŻ 7 ニつの 此 的 たことは ある ٨ であります。 類の思想發達の上に現は 會の一員として社 夫れ 社會 一義的思想と云ふも 類 の社 や愛 P の上に Ø 會道德 自由、 責任 ŧ 國的社會奉仕とは其 12 は と申 でありまず。 決し いも > 明 單 立 威 カラ しますなら のであ 十に封建 てら لع です 平 T は n 從つて今や單 等 社 あることは ることは 會 Ó, 方 n T 會 博愛等 從つて此 の一員 は 12 0 h 的 而 連帶 のは少くとも 奉仕生 ました ばそ 責任 τ í. n 社 0 そして 責任 なる 12 Ø のこと 0) 會 威 あ 社 新 は 0 活 った 0) は 华 卆 會思想 一つき Œ 意 然 とし 戚 申 すま r 於 味 U 12 0) 0) は r 異けに 民思 **\(\bar{\}** 今 T 責 T 强

會の潮 從て今 て來た 私共が <u>ح</u> のであり は 3 13 到底できることではない 0) つて 所有 ます 12 於て社會の責任を無視すると 會. 思想で云ふも ます。從て計會の一員た の生活事 質 のであります 0 のは L 二大社 12 現

つて此 変た も の配 T 運動とも と云ふこと 乍然此 0 特權階 12 下 0 す のではな 瓜 の思 b の人 想と 0 の社會思想としての人 ることが 級に と云 H A. は 0 歐 對する ል 間 < 洲 \$ より之等 12 0) 0) して反て之等 できる のが 0) かき 於 勃興で 個人 實を τ 歴史の事實であります。之等の壓迫に反抗して起 に對して民 下流民衆の ことが は社 何 のであ # 静 義に よつて起 曾の上 1: の上流 で 觀 類の自由、 對す 察す 杂 きる 自 b する民衆 0 由 流 つて 思 n の權 から 13 ます。從して起っ ば一方 民衆の 6 想 力階 平 1 あ 0 起 來 之を 反抗 12 b 7 祉 Ŀ 級 T

> つて 云ふことが は又見様によ 論は 0 は 一大 n 今 P T إفيتج 種 12 Ł つ 3 τ 0 0 つて で 祉 のであ ð 會 b. 祉 會生活 ますの となり ます 0 ---八主義運 延ては 大 Ħ の民衆 ٤ 杫 動 5 會

のこと 其の 雖も せん。 ど配會全体 以て其の理 の社會主義思潮に 的 乍然今日 T 社 少く 未だ民 從つで ます 會思想に反對するも 0 8 の興論 想とす までの 生活 從て 思 其の一般 人生きて 類 一般 12 想としては であり、 よって動 至 べきであ 骴 會生活 っ 0 ては 1, 的公衆の前に ると 上流階 のとて ると云  $\sigma$ 1 Ŀ 社會全体の b 流 τ は 實際は未だ 云 8 いる 階 級の 决 はあ à ^ う n は 0 民 ۲. 0) 此 特 问 T 0 T 人 b 權者流 上發展 充分 此 0 から ŧ 0) は 12 12 せん 祉會 あ 13 多 0) は は殆 い社 論 5 1 T 無 Ø 會論 かす 主 Į h 8 ŧ

るいと高き眞人の出現を要するものがあるのであ會民衆の社會主義運動よりも、寧ろ是等に反對せ現にまつと云ふべきものかも知れません。從て此よりも一層高き人類の理想を理想とする眞人の出かゝる眞實の社會理想は寧ろ民衆の中よりと云ふさへするのであります。否、それどころではない、

義ならばよいのである の自覺覺他の第 できるものではない 會主義思想に於て心から讃成することも亦 や道德主義(封建的)がよいのであると云ふのでも ると云ふのでもなければ、又昔のやうな個人主義 主義思想が昔の如き個人主義思想よりも劣つて ありません。けれども今日の如き多く ます。 乍然私共は 個人主義であり、 一如の全一主義であつてこそ、 かく云へばとて、 一義たる自利々他圓滿の一体主義 方向に相一致して向上し發展し のであります。 か、こゝに至つて所謂佛教 又如何なる意味の社會主 決して今日 然は如 の社會及社 個人と社 0 何 なる U T 會

> のと云 其の 心に 想中心となり、 完成 求する點に於 會人類の理 のであります して、 の意味に 一致し、 ば全く 説を一にし、 合致する を中心とする つってよ 利他 想中心をなしてゐるも 全人類の自由、 社會全体の人 τ, 於て佛教の から家族主義から見 的 ので 國家主義から見れ 人 ありますし のであります 見れば全く各人の圓 而も特種階級の獨專的個人主義 類の向上發展を中心さする あります。 主義と佛教とは 個人主義と社 平等、 類發展上 、之を利 から個 成上から見れば配れば國家の理想中 博愛の れば全家族 の で 會主義 他主 あ 主義とは 致する 世界を要 の理 か 0 \$ 6

きをなして來てゐることも事實であります。はより一層に特權階級の民衆壓迫の方面が更に重想が多く叫ばれて來たのにかゝはらず、其の事實年然今日の實際社會は此の意味の社會主義的思

# へ の 歳 こ 初 夢

妙味 カジ が 傳說 あるやうでございます。 十二支の を味ふて見ますと無碍に捨て難 か ある \$ か又ないの 知らねば夫れ 研究したことがありませ か が吾々 良 イイ知 りませ の質生 V 或 8

似て居る す。是れは私が駄絣を弄する迄もに生れた者の性質や運命を兎に例 私は ~ 0 卯 あります。又此の昔話が私の性質を充分に物お話で子供さん方に至るまでよく御存じのこ ħ の歳に生れました、 點の多いことであります。 感心して居るのは私の性質が極 備へて居ると云ふことは兎と龜 叉此 駄辯を弄する迄もありません。こ の昔話 λŞ 卯は兎と同義 私の性質を充 へられ 兎は傲慢と怠 の駈け競 めて兎に てあ で の歳 E りま

すが此の地球は蕨と共に十二支を次から次ぎへ還然し是れは個人々々の持つて生れた性質であります。

へられてあります。つて其の嵗獨特の動き即ち顯はれをすると言ひ傳

意

難來人類 人教で 0 山 Ø か 0 あり 口 から街へ街から村へ響き渡るで はあ無力なる我は惰民より醒めねばならぬ がは否徒 中摸索の狀態であります。今日此 より或は敎育家の口 あります。 流れ或は右傾に馳 都でも鄙でも津 元へ歸る歲である將に の危機と叫ばれてをります。内は思 らに聲を大きく 時其の時 傳説の如何に拘 々浦々に至るまで或は宗教家 へ響き渡るではありません が來るで せ 7 題の行 であ より民衆の聲となつて國 することは止めて、此 ります、 旣にその立 き詰り しよう はらず全國民は全 來 の本願に の難局を打 曉の鐘は 或は を失 想外 る 0

τ よう 申  $\tau$ Ż b n 白 0 3 でも申すお方でしようか私の には 夢を見たのであります。此の意義ある可き寅歳の だとお笑ひの人も こんな話を致しますれ 其 年頭 少なくな 0 前 綱概 12 12 表 は いば りま は れ夢 で

がら油 方法 燭 を此 **にてお前と云ふ者は永遠に無いであらう** 12 行 () お 12 なら たら 一つある か くことの出來な しないで お 0 前の行 蠟燭に は火は 敷干丈も 白い夢ではありません ι. • 0 一本の つた それ も消 の雨 益々然ん は の境域の普倫 あ 手は其の光がなくては ならば、 い難 えるのだ。然し消えない風の强い晩に然も裸蠟燭 る るであらう。 は全身の油を搾つて夫れ 谿問 路なん ては光益々强く へ落ちて死ぬより が生命 生命の火はたちまち 晩に然も裸蠟燭 と全命のお 72 若し全身 吾々の 若し其の 火前 を点 一步 ا ک の油を 劫を に注 方だか 12 外に 火が も進 ij ふ蠟 T

> 希望に 輝き行 の努力によりて成就せら れるの

大 12 心精進に 剋果す べし、何の願か得ざらん。道を求めて止まざることあら U)

きは小 あり 三千年前 日 ます。 より の社會狀 τ て將 に吾人 は萬物の して自己完成 態は の 過去久遠に展開 整理開拓 眼に 大文字であります。 影じ 國家的に 是れ た希望 Ø 願 られるのであります 行 の火、 15 は吾人の努力如 は世界の統 對する報土で **ー** の

今日 活に満足が出來ましようか。 幾多の生命の犧牲によりで築き上げられ不完全ながら今日を生み出すにも、有史 ぬことは火 らば依つて來るもの よりも 足が 若し今日聰明なる希願と精進を怠 を見る つと住み心地の悪い所に 來ない よりも のに、如何して今日以りも明かであります。 は後悔と悲鳴でありませう。 如何して今日以下 有史以 住まねばなら んのであ が前より つたな 々は の生

弟の進む可ぎ道は各自先天的 に持つて生れ

三寸 した なって り極めて精巧に極めて巧妙に聞 の受信様に否ラデオ發明より幾千萬億の背よ 3 部より放送せられ 文明により か。 て例 たる使命の聲は臍下 ラ **いるではありませ** チ オ は で互 發明されま b 12 意志 せ

の意志も 巧み 放

交換することも出來ます。

眞面目に落付いて斷行致じませう。熟慮の時は過ぎました。今は斷の一 たならば今日の吾々 は永遠に葬り り去られるので、此の機會を逸 字あるのみ

便

誠 舊 中 ĺ は成 年 ばさ 0 7 有喜んで居ります。 種々御教導下さいまして駄馬の歩みの私も る 就するものと極めて簡單に考へてゐた私に た事 なこと人の心の様 年の新春に當りまして人 ゝ上人の御前に一言御祝ひ 難なものなること 出來るもの誠心と決心さへあれば 昨年は な姿を味ひまし つく **カ**\$ 感ぜられ 申上げます。 ぐくと世の 120 まし

とはよく は怠け者 ならぬことも相當了解 の全力を盡してあらゆる 唯だ私達は そうでなくそこ ては唯精進の一 120 時の 視することの な の常套語 τ 大な役 かく 時が ことだとは思つてゐます じる 0) 路を辿りた の様に 解決すると云ふ人の言葉を從前 目 ζ. を演じてゐることも 右の様な感じの許に自己とし 0) 萬事時の してゐます 理 思つて 障碍を取り除かなけ のある事を と云ひませう いことも亦事實だ 解決に るまし 、その中には なが O のみ任すこ h 寧ろ自己 りま と思 れば 120 仲々

くるとするも必ずや實現するものと信じます。の精進なればタトヒ現在は複雑なる時の干渉を受と無限の同情と正しき判斷。これが根底になつてが三個の信條が必要と信じます、即ち絕對の滿足と云ひませうか、その各様な何とでも云へませう

村雲の汚すかまゝに任せおき

この如き駄句を作つて安閑としてゐた時もの如き駄句を作つて安閑としてゐた時も

吾が部屋に月の光の流れ來てましたが又

机も人も小波の中

存してゐます。 是か何れが非かは知りませんが常に此樣の心が內し現在私の心は二樣の姿を現してゐます,何れがと佛の慈悲を月夜に喜んだこともございます。然

月を見るその度毎に吾は思ふ

吾はた、佛のむねに任せなん

よきも悪しきもそのまゝにして

然しこれが現在の私には少しも矛盾を感じません

可予告し呉んら道こでも歩んではるのでしたら一事も樂しく愉快になしております。極めて調和よく並行してゐます、而して平常の仕

す。
刻も早く御教示下さいませ。伏してお願申上げま刻も早く御教示下さいませ。伏してお願申上げま

眞生の国 誠に ても 情をお知らせ申上げて御教示を仰ぎ度 に色々御教示に 念に思ひます、せめては月に一回 したが常にあの會合に參加さして頂けな 殘念でございます。 私は参加致しか K いませっ 0) 語も承 事情と時間の都合上當分はタ 預 はりました、 かる會合を催し 申上げました、 ねる樣な狀態にあり 茲に拙き筆にて自分の近 宣言書も 從前 妄言平に御 12 合掌敬具 4. 御多忙 の様 ŀ と思ひます 讀致しま ますので E いのを殘 に直接 行 はれ 中を

一月九日

三枝樹正道拜

土屋上人前

ものが ては此 の厚き同 一面 ずしもさうば ての事情を自分の思ふ 的 近來にな 1-たすことを得まし 12 は道友 0 道 あります。 の爲 四十を迎わ い私の喜びであります。 めに の人 かり うて 0) 殊に 力添 A でも かゞ るに 案 一様に 徒に へして 思 な 12 で つたよりも更に一層に人 いことを知りました。 つけ たやうです。 のみ 理 ح 0 ことを知りました、又のみ信じた世界が、必理想のみを説いて、總理想のみを説いて、總 12 た學寮の いたいくことは之も 內外 b に私 にとつ 一端 友

はそ うな光明生活の集りといふよりも 更に þ こそ近來 この正月の清 えす。 T あります。 72 0 12 ない 生きやうとする真生の集い **い一つの宗教革進の一大展開水實相寺に於ける念佛三昧會** 而て今春の集りは たる道友の集りであること 一つの宗教革進の一大展 進步で b ţ, つも 2 で 0) たあ P 0)

■觀道より

とうに

O)

0

も愈

17

之か

G

す。 障り 私 老人の中間に入 せん、孔 に眞人の自覺として力强く感ずる蔵とてはありま であります。 つて殊更に歳の加はるのを覺えるやうな氣がしま 老ご聞 なり \$ でもないやうな氣が 初老なごと云 は我なが 人生五 b しく 12 12 まして、 は Ų, 此の點から云 子が四十にして惑はずと云は ては吾 かと御 4 變り 自分の氣分 らウ になりまし 年と若い頃に るなど も在りません 0 となく 過ぎて、 てお ながら少 力 素じ申してゐます。 ツには は夢にも します。 ~ る ば私 が私 から云へば今年位私の 今歳ばか た、三十にして立 い 々驚かざる して 聞 T V Ø 思はれ 或る人 は T お 未だ りは れな いた私 近頃の寒さ を得な 13 初 n ŗ ŗ 老なごと った ります。 四 72 b つもと違 やうな気 心であ 一十を以 は つと云 かず 四 1 + AL. 0) 0)

て止みません。 に揚げておきます。 叉大阪 0 カン る で 道友の 1 眞生同 ますの 結衆が 念の 為 め 各地に生れることを希念し 衆 は 1: か カジ 其の同盟の草稿を別項 > る眞生の團 n たの 結に於 B

て

12 0 今歳こそは思い切 て下さ 悪意からで 0 はあり (三三日) 0 ませ T ん願く 切の年賀狀を欠ぎまし は之をも善意に

眞生同 盟大阪支部 綱領並 = 規約

ح 期し宇 て宙 -○永の 遠本綱 の源生だ 命る領 と経野 限の の如 向來 上包 一とを實し 現せん

)

協議ヲ

經

テ髪

妨レ本業修本生本本 ゲガ同ヲ養同玉同同 ズ人盟為會盟可盟盟 選ハスラハンハハ規 選い加盟者ノ互選ニ依、事務所ヲ大寶寺(大野ノ親・維誌「光明」ヲ發やハ親領ノ・主旨ニ基キ講のの、エノバトスに、「異生同盟大阪支部」・ 川盟者ノ互選ュ ・ 本語 | 光明」コ ・ 大ス | 光明」コ ・ 大ス | 光明」コ か但シー 行演 シ會其並 市稱 天ス・王 重ト 他二 した。 寺 ヲコ

> 七六 、出出加 = 合第加盟本 ・ 基、出出加ニ合第加盟本 、、、 念綱金モスス盟關シ四盟者同發無指 ルル者シ綱項者1盟送務 導 コ加光修=使ト者モハ協領/ハ紹ニ係係 ト盟明養基途スアノ基議=係常介加若若 ノハ紹ニ係係者 金ヲ基ハニニ盟干干名 クヲ ルト 時スト行ク毎所依セ名名 ル總行:傳左 、シフ各月定ルン ハ 之本テモ種第ノモト ス費通 ヲ同毎ノ事一徽ノス 過補ル其リ **年助補他定** 受盟月ト業水章トル 納ニース其曜ラス者 助ノム 係若干名 他日佩 シ對口 必ニ用 業費ノ 基シ金 旗 要サルル 名 以 補助 Ŀ 入ヲヲ ル申醵

加

ア者發會 シノ

一回了二日發行。蒋田